

一般演題 L 内分泌（甲状腺以外）・代謝

184. 副腎スキャン剤 ^{131}I -19-Cholesterol に
よる原発性アルドステロン症の腺腫の局
在診断

東北大学 第二内科

中嶋 凱夫 竹内 孝彦 西里 弘二

福地 総逸

放射線科

中村 護

〔目的〕 原発性アルドステロン症10例（右副腎腺腫7例，左副腎腺腫3例）に対して ^{131}I -cholesterol による副腎スキャンを行なった。

〔方法〕 ^{131}I -19-Cholesterol を体重 50 kg 当り 1.0 mCi づつ肘静脈より注射して，8日目にスキャンを行なった。

〔結果〕 右副腎腺腫7例中6例で明瞭な腫瘍像を得，偽陽性像は1例も認めなかった。

左副腎腺腫例3例では明らかな腫瘍像が得られなかった。腫瘍像が得られた症例の腺腫の大きさは，直径 1.0 cm 以上であった。陰性を示した右副腎腺腫例1例の腺腫の大きさは， $1.0 \times 0.8 \times 0.7$ cm であった。手術で左副腎腺腫を認めた3例の腺腫の大きさは，2例で1.0 cm 以上，1例で1.0 cm 以下であった。腺腫未摘出例の2例は，気後腹膜造影法，および副腎静脈撮影法にて左副腎腺腫と診断されたが，手術により左副腎に腫瘍を発見出来なかった。その後副腎静脈血アルドステロン測定，および副腎スキャンの結果より，右副腎腺腫と診断された例である。

本法による副腎腫瘍像の陽性例と陰性例とでは，末梢血中アルドステロン含量，およびアルドステロン分泌量に差を認めなかった。

本法と他の部位診断法とを比較してみると，気後腹膜造影法では，10例中5例で陽性像を得たが，1例では偽陽性像を示した。副腎静脈撮影では，9例中3例で陽性像を得たが，カテーテルの挿入不能例が1例あり，しかも造影を行なった8例のうち5例に副腎出血の合併症を認めた。副腎静脈血アルドステロン測定は，正しく採血されれば全例で確実な診断を下せた。しかしいずれの方法も本法に比べて患者に対する侵襲がつよく，高度の技術と経験を要した。

〔考按ならびに結論〕 原発性アルドステロン症の腺腫の局在診断，および特発性アルドステロン症の鑑別診断に有用であり，偽陽性がなく，容易に実施出来る価値の高い検査法である。

185. 副腎スキャンの臨床経験

北里大学 泌尿器科

鯨島 正継 石橋 晃

放射線科

石井 勝己

近年副腎スキャンが開発され，機能と形態の加味した優れた検査法として，本邦でも二三の報告がみられるようになった。我々も第一回関東地方会で6例の臨床経験を報告したが，更に症例を追加し若干の基礎的検討を加えて報告する。

症例は一側の腺腫2例，過形成2例，一側の石灰化症1例，正常例3例の合計8例である。いずれも甲状腺ブロックを行なった後， ^{131}I -19-iodocholesterol 1.5~2.0 mCi を一回静注し，7日後にスキャンを行なった。なお初期には5~8日に行なった例もある。使用装置は，5インチ対向日立全身スキャナーを用い，加算方式で行なった。注射時の副作用は，正常例の1例のみ悪心を来したが，特に処置せず軽快した。

陽性像を呈した症例は8例中6例である。以下その症例を示す。腺腫の2例は，それぞれ1才7ヶ月男子（主訴；顔面発疹）と39才女子（主訴；高血圧症）で，いずれも内分泌学的検査および IVP などで本疾患が疑われ，副腎静脈造影でほぼ診断を確定し，手術で組織診断も行なった例である。スキャンでは2例とも患側に著明の集積を認めた。

一側の石灰化症は57才女子（主訴；心窩部不快感）で消化管診断時に石灰化像を認め副腎静脈撮影などで石灰化像は副腎であることをたしかめた。内分泌検査は異常なく，手術時の診断は両側副腎は正常，ただ石灰化部は癒着強度であった。組織は検査中である。この石灰化症を含めその他，左側過形成の1例（58才女子）および正常例の2例（42才男子，38才女子）に両側陽性像を認めた。

以上より少なくとも皮質腺腫では，患側に著明な，ほぼ腺腫の大きさに一致した集積を認める。これは手術側の決定，本疾患の診断に極めて有用である。また ^{131}I -19-iodocholesterol の体内動態を ^{125}I -DDD と比較し，マウス全身 autoradiography で検討中で，これも報告に加える予定である。